

濱田滋郎 ● Jiro Hamada

【無伴奏ヴァイオリン・リサイタル】は、誰による演奏を聴くとき、最も安んじて耳と心とを委ねられるか——この設問に対し、真先に名の挙がる一人が、渡辺玲子であろう。当盤において彼女はパロックから現代まで諸時代の作品を取り上げて聴かせるが、様式、タイプの違いに異なるものの曲目をも文字どおり完璧に弾き切っている。この精度の高さには脱帽のほかあるまい。まずはイザイだが、選んだのは第6番。スペイン人のマヌエル・キロガに捧げたところから後段にはハバネラ風のリズムも出される明るく洒脱な1曲だが、これと、3曲目に置かれたメインのJ.S.バッハ《バルティータ》第3番とが、ホ長調、快活さという共通項を呼応させ、ディスク全体の色調を定めている。両者のあいだに置かれたのがヒンデミットの第1番、バッハの後が佐藤真《幻想曲》という取り合わせもコントラストの妙を生かしてそれぞれの作品のおもしろさを引き立たせる。結びの2曲はエルンストの《魔王》の編作、《夏の名残りのばら》の変奏曲だが、これらがまた、さらにはない聴きもの。《魔王》はドラマティックな運びのうちに名歌手の語りくちを彷彿とさせるし、懐かしいアイルランドの旋律を千々に花咲かせ、散らせる変奏曲——多声的練習曲——とエルンストは名付けたが——の、技巧を超えたロマンティックな情趣のほども、快さの極みと

言えよう。なお、使用楽器は「ムントツ」と呼ばれる1736年製のグワルネリ・デル・ジェス。

濱田滋郎 ● Jiro Hamada

【チェンバロとオルガンを一人で演奏できたなら楽しからうと考える、その思いつきを表現してしまつたアーティスト、クラウディオ・プリツイ。彼のアイデアを汲んでピンキー・バルツキエーリが2001年に製作した「クラヴィオルガン」すなわち小オルガンとチェンバロ双方の機能を備えた、珍にして便利な楽器を縦横に駆使し、プリツイが奏でていくのは、F・クーブラン、W・バードなどからJ.S.バッハの諸作、D・スカララッティのソナタ、ソレルの《ファンタンゴ》、コレア・デ・アラウホの《ティエント》《グロッセ》など多岐にわたる。いずれの曲もこの楽器ならではのカラフルな効果が生



プリツイ／クラヴィオルガン・ワンダーランド

【F.クーブラン：目覚まし時計／フェアファクス進行曲（作者不詳）／バード：《戦争》〜笛と太鼓／ケルクホーヴェン：ファンタジア／貴婦人ヶアリーのダンプ（作者不詳）他（全18曲）】
（詳細は巻末新譜一覧表参照）
クラウディオ・プリツイ（クラヴィオル）
[カメラータ◎CMCD28244] ¥2940



渡辺玲子 / SOLO

【①イザイ：無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第6番②ヒンデミット：無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第1番③J.S.バッハ：無伴奏ヴァイオリン・バルティータ第3番④佐藤真：無伴奏ヴァイオリンのための幻想曲⑤エルンスト：シュベールの《魔王》による大奇想曲⑥同：多声的練習曲第6番《夏の名残りのばら》】
渡辺玲子 (vn)
[フォンテック◎FOCD9552]
CD&SACD ¥2800

歌崎和彦 ● Takahiko Utsaki

【録音評】音像は多少太めだが、ことさらソロをアップした印象がないのは好ましく、演奏を細部までフォーカスよく捉えている。ただ、響きがよりクリアになるにつれて、しなやかな残響感が加わる2chに比べると、CD層は穿眼的な深さには不足し、最高域が少々硬い感もある。2chは音色が向上して、硬軟の響きや音と表現の変化を的確に伝えてくれるので、演奏がよりいきいきと明敏に感じられる。マルチchは空間が大きくなり、表現の細部がさらによく見えるが、多声的練習曲もなるのでその点には2chと好みを分けるかもしれない。
(92/93)

た真摯なもの。エルンストの2曲は一聴して要求される技巧の高さが分かる曲で渡辺もそれによりよく感えているもの、欲を言えばもっと和声が聴こえてくるという。

那須田務 ● Tsutomu Nasuda

【無伴奏ヴァイオリン・リサイタル】は、誰による演奏を聴くとき、最も安んじて耳と心とを委ねられるか——この設問に対し、真先に名の挙がる一人が、渡辺玲子であろう。当盤において彼女はパロックから現代まで諸時代の作品を取り上げて聴かせるが、様式、タイプの違いに異なるものの曲目をも文字どおり完璧に弾き切っている。この精度の高さには脱帽のほかあるまい。まずはイザイだが、選んだのは第6番。スペイン人のマヌエル・キロガに捧げたところから後段にはハバネラ風のリズムも出される明るく洒脱な1曲だが、これと、3曲目に置かれたメインのJ.S.バッハ《バルティータ》第3番とが、ホ長調、快活さという共通項を呼応させ、ディスク全体の色調を定めている。両者のあいだに置かれたのがヒンデミットの第1番、バッハの後が佐藤真《幻想曲》という取り合わせもコントラストの妙を生かしてそれぞれの作品のおもしろさを引き立たせる。結びの2曲はエルンストの《魔王》の編作、《夏の名残りのばら》の変奏曲だが、これらがまた、さらにはない聴きもの。《魔王》はドラマティックな運びのうちに名歌手の語りくちを彷彿とさせるし、懐かしいアイルランドの旋律を千々に花咲かせ、散らせる変奏曲——多声的練習曲——とエルンストは名付けたが——の、技巧を超えたロマンティックな情趣のほども、快さの極みと

那須田務 ● Tsutomu Nasuda

【カメラータ・トウキョウは、これまでもイタリアのオルガニスト、プリツイの弾く、ツイポリーの鍵盤作品全集や室内楽や協奏曲など、クラヴィオルガンを用いた様々なディスクをリリースしてきた。ライナー・ノーツの解題などを読むとこの楽器はオーセンティックな歴史的楽器というよりは、レパートリーなどに合わせて新たに様々な工夫が加えられているようだ。もちろん、それも楽器へ向き合い方の一つで、こういうアプローチは古楽器の演奏家たちの間でも決して珍しくない。それはともかく、その度に様々な改良が行なわれてきたのだが、このルネサンスからパロックにかけての作品を収録したヴァラ